

スピーチコンテストへの挑戦

現代中国学部の学生は、数々のスピーチコンテストにチャレンジし優秀な成績を収めているが、ここでは特に全国規模の中国語スピーチコンテストにおいて上位入賞を果たした人たちを中心に紹介する。 (編集部)

中国語スピーチコンテスト歴代入賞者

2000年11月 ● 第14回西日本学生中国語弁論大会 (京都外国語大学・上海教育国際交流協会共催)

第2位 小貝洋子

テーマ：如果你在那里 (もしもあなたがそこにいたら)

2000年12月 ● 第34回中国語弁論大会 (朝日新聞社、朝日イブニングニュース主催)

第3位 高橋友希

テーマ：意外的收获 (意外な収穫)

2002年12月 ● 第20回全日本中国語スピーチコンテスト (日中友好協会主催)

第1位 富永清美

テーマ：一个小小的体验和我的现在 (1つの小さな小さな体験と私の今)

2003年11月 ● 第21回全日本中国語スピーチコンテスト (日中友好協会主催)

第2位 寺西貴子

テーマ：愿望——一句话给我的启示 (私の願い——あの一言がきっかけで)

2003年11月 ● 第17回西日本学生中国語弁論大会 (京都外国語大学・上海教育国際交流協会共催)

第3位 渡辺乃奈己

テーマ：在非典中的感受 (SARSの時に思ったこと)

2004年8月 ● 第3回「漢語橋」世界大学生中国語コンテスト (国家対外漢語教学指導グループ主催)

日本代表 青木沙弥香

テーマ：诗舞——中日文化的巧妙融合 (詩舞——日中文化の絶妙な融合)

2006年11月 ● 第20回全日本学生中国語弁論大会 (京都外国語大学・上海教育国際交流協会共催)

第1位 伊藤えり

テーマ：为了活出个自己的样子 (自分らしくあるために)

2007年1月 ● 第24回全日本中国語スピーチコンテスト (日中友好協会主催)

第1位 伊藤佳寿子

テーマ：跳出排他性民族主义的圈子 (排他的ナショナリズムを乗り越える)

2007年11月 ● 第21回全日本学生中国語弁論大会 (京都外国語大学・上海教育国際交流協会共催)

第2位 盛田美帆

テーマ：中国火车上的感受 (中国の列車で感じたものは)

小貝洋子〈第2期生〉

愛知大学現代中国学部の創設10周年を、心よりお祝い申し上げます。私が「西日本学生中国語弁論大会」に出場したのは、7年ほど前のことになります。大学3年生の夏休みに行ったニューヨークで鑑賞したブロードウェイ・ミュージカルに刺激され、そこで得たものを何かの形で表現したいと思ったのがきっかけでした。しかし、持っていたのは意欲と度胸だけで、中国語らしい作文力や表現力は十分な水準に達していなかったため、出場に際しては、大変多くの方にご指導を乞いました。現代中国学部には、本当に多くの素晴らしい先生方や優秀な仲間がいて、また皆さんとても親切で、そういった意味でもたいへん環境に恵まれていました。また、4カ月の現地プログラムによって人と人との絆が深められ、いざという時に支え合う関係を築くことができたのではないかと思います。そんな皆さんの助けなくしては、出場することすらできませんでした。この場をお借りして感謝を申し上げたいと思います。一緒にNY旅行してくれた友達へ、インパクトと論理性のある作文に協力してくれた留学生の友達へ、表現指導を快く受け入れて下さった先生へ、発音のポイントを教えてくれた在日中国人の友達へ、テープにお手本を録音して下さった先生へ、くじけそうな時に励ましてくれた友達と先生へ、本当にどうもありがとうございました。

“It couldn't have been done without you!!”

弁論大会を通して、自分は本当に多くの人たちに支えられていることを実感し、それをとて有難く感じることができるようになったと思います。この弁論大会で2位を受賞し、3位までの受賞者と上海旅行に行かせていただいたことをきっかけに、今でも連絡を取り合う良い仲間と出会うことができました。その後も私はたびたびNYを訪れ、昨年末にも4度目の訪問をしましたが、また新たなパワーをもらって帰って来ました。今年もより一層、語学学習に励んでいきたいと思っています。

高橋友希〈第3期生〉

中国語弁論決勝大会に出場してからすでに7年以上経ちましたが、今でもその時のことをよく思い出します。

私は中国語を学び始めてまだ1年半の時に弁論大会に参加しようと思い立ちました。その時は、入賞を目指すというより、中国語のレベルアップのためでした。しかし、指導にあたって下さった先生から、「せっかく出場するのだから入賞を目指すように！」と励まされ、入賞という「結果」を目指すプロセス作りを指導していただきました。短い準備期間で「入賞」という大きな目標を達成するには、「文章作成」「発音練習」「感情表現」などを、段階的に、スケジュール通りにこなさなければなりません。その一つひとつのプロセスに全力で取り組んだ結果、自分の努力に自信を持って、本番に臨むことができました。おかげで、全く緊張せずに自分のイメージ通りのスピーチができました。

私は弁論大会入賞という大きな目標に取り組んで、社会人としてやっていく上での基礎を学んだと思います。学生なら決められた範囲の勉強をして合格点を取ればよかったところが、社会人は与えられた仕事は



できて当たり前で、それ以上にどれだけの結果が出せるかで評価されます。自ら可能性を限定してしまつては一步も先に進めませんし、漠然と考えるだけでなく実際の行動に移し、その上でさまざまなことに柔軟に対応していかなければなりません。大きな目標を掲げても、準備を怠ると結果を出すことはできません。

弁論大会を経験した後の私は、参加を決めた当時の私とは比べようもないほど成長していました。参加前は入賞なんて絶対無理だと思っていましたが、努力が結果に結びついたことで、大きな自信がつき、今もその経験が役に立っています。そして何より、弁論大会に参加するという「第一歩」を踏み出したことが、私にとって大きな進歩だったように思います。今後も一人の社会人として、私にとって大きな「一歩」を踏み出していきたいものです。

富永清美〈第3期生〉



大学4年生の秋、日中友好協会が主催するスピーチコンテストに出場しました。2年生のときに一度出場して以来、2年間、ずっとこのために練習を重ねてきました。そして出場したこの大会でよい成績を取めることができました。入学当時から中国語の魅力に惹かれ、自分のすべての情熱をかけて打ち込み、発音、抑揚のつけ方など、少しでも中国人に近づきたいという思いで努力しました。こうして自分の打ち込んできたことが、スピーチコンテストでひとつの形を結んだことは、現在の私の大きな励みになっています。

北京での1年の留学生生活を終えて帰国したのは4年生の夏でした。そのころ同級生はすでに就職活動を終え、内定をもらっていましたが、一方で私は、自分は将来どうするべきか、どのように中国語と関わっていけばいいのかが非常に悩んでいました。しかし、その中で出場したスピーチコンテストで自分の努力が報われたことや、私のスピーチを聞いてくれた人たちの「感動した」という言葉に背中を押され、本格的に中国語を使って仕事をしようと決心しました。その後、愛知大学の中国研究科へ進学し、中国語をより深く学びました。

現在は、愛知大学孔子学院で中国語を教えています。生徒さんは高校生から70代までさまざま、教えることは自分が学習することとはまた別の難しさがあります。しかし今、スピーチを練習する中で身につけたものが、非常に役立っています。たとえば、「謝謝」という言葉を仏頂面で言ってもそれは中身を伴わず、相手に伝わりません。「謝謝」は笑顔でいうのが一番大切なのです。言葉を発するときに正確な発音が求められるのはもちろんですが、表情や声色も発音と同じぐらい大切だということがわかったのは、このスピーチの経験があったからです。

愛知大学現代中国学部の先生方には中国語の面白さ、素晴らしさを教えていただきました。どんなときでも暖かく励まして下さったことに本当に感謝しています。

青木沙弥香〈第4期生〉

「漢語橋」は、一般のスピーチコンテストとはかなり異なる中国語大会です。その競技内容はスピーチだけでなく、例えば中国伝統舞踊などの文化技能と、さらに中国に関する知識も披露しなくてはなりません。準備はとても大変でしたが、それはまた非常に有意義でもありました。スピーチはもちろん、文化技能についても（私は京劇をうたいましたが）、多くの先生方のご指導をいただき、自分の“芸”に磨きをかけることができました。また、中国を新たな面から知ることができましたし、世界大会ということで、おなじ“中国”を学ぶ世界中の大学生と交流できたのです。これは、素晴らしい体験であり、一生の思い出として心に残っています。「漢語橋」に参加してから、大会の名の通り、中国語を通して日中に“橋”をかける仕事がしたいと、より強く考えるようになりました。その後の中国留学中には、通訳アテンドや翻訳の仕事をさせていただき、また在学中に中国語の教員免許も取得し、2008年度から勤務する高校では、中国人留学生のサポートを一任されました。これからも、微力ながらも日中間にかかる“橋”の一部になれば、幸いであると思っています。



伊藤佳寿子〈第6期生〉

私には大学時代を通して大きな目標があった。それは中国語のスピーチコンテストに出場し、日本一になることであった。学内外を問わずたくさんのスピーチコンテストに挑戦したが、正直言うと、納得のいくスピーチができたためしは一度もなかった。コンテストで負けるたびに何が足りなかったのか、その都度振り返って反省した。4年越しの夢だった全国大会への切符を手に入れたとき、心は期待と不安でいっぱいだった。「県の代表になれた、それだけで十分。ようやく全国大会という夢の舞台に立つことができたのだから、私らしい、楽しいスピーチができればいい」。日本一になるというただひとつの思いが、私を支えていた。スピーチの練習中は、忙しいなか時間を割いて一生懸命指導してくれた先生の情熱に負けそうになったときもあった。燃焼しきれない自分が情けなくなって、練習途中でトイレに駆け込み、悔し涙を流したことが何度もあった。そのたびに自分を責め、そしてしばしば不安で仕方がなかった。しかし「日本一」という夢に向かってめげずに挑み続けたことが、私をより一層強くしてくれたと思う。大切なのは途中で諦めて投げ出すことではなく、どんな形でもいいから続けることなのだわかった。うまくいかないときなんてよくある。むしろ成功することより失敗することのほうが断然多いかもしれない。だけどそんなとき、諦めて投げ出してしまったらそこで負けである。葛藤を続けながらも、自分自身と闘い続け、乗り越え、克服する。そうすればきっと今よりも一歩また成長できる。人生とはその繰り返しではないかと思う。



向かって右が本人

私も彼女は大大会ではライバル同士だったが、今は互いに良き理解者であり、大切な友人である。同じ舞台上で戦ったからこそ、本当の意味で私たちはわかりあえる。彼女は今中国に留学している。ときおり彼女から来るメールに励まされ、勇気づけられている。彼女が中国で頑張っているという事実、ただそれだけで自分も頑張ろうと思える。そういった励ましあえる友の存在こそ、人生において何よりも貴重な大切な財産である。彼女は人一倍努力家で、語学の才能も抜群だ。私にはないものをたくさん持っている。おそらく、全国大会に出場しなかったら一生出会えなかったであろう友の存在を、私はとても大切に思っている。

渡辺乃奈己〈第6期生〉

スピーチコンテストに挑戦することによって、「困難なことに挑戦することの大切さ」に気づきました。なぜなら、挑戦したからこそ、気づき、学んだことが多かったからです。

例えば、間違った発音の癖を直すために、何度も自分の声をテープに録音し、中国人の発音のテープと聞き比べ、聞く、気づく、直すことの繰り返しを行いました。時には思うように上達しなかったことや、モチベーションが下がり諦めようと思ったこともありました。しかし、初めは気づかなかったことも、練習を積み重ねることによって発見することができたのです。その結果、スピーチコンテスト当日も堂々と発表することができたのですが、それを可能にしたのは、日々の努力から生まれた自信だと思っています。

また、自分の力だけでは限界があり、先生や中国人の友人に指導をお願いしました。忙しいなか、自分では気づかなかったまちがいなどを明確に指摘していただいたことで、改善の幅が広がりました。一つのことをやり遂げるには、自分の努力だけでなく、協力してくださる方々、応援してくれる友人、一緒に頑張る仲間がいたからこそ、成し遂げることができたと思っています。感謝の気持ちを忘れてはいけないと気づき、私のやってきたことの背景には多くの人の支えがあることに有難く思うようになりました。

この経験があったからこそ、その後の中国長期留学にも、興味のあることはやりきろうという気持ちで取り組むことができました。現地の人々との交流を一番大切に過ごしたことで、言語以上に中国の文化、国民性などを肌で感じ学ぶことができました。中国留学で出会った人々との交流は、私の人生において大きな財産として残っています。

今後も仕事はもちろん、プライベートも、興味を持ったことは積極的に考え、実行し、多くの人と関わりながら、感謝の気持ちを大切に成長していきたいと思っています。



伊藤えり 〈第9期生〉

第20回全日本学生中国語弁論大会に出場し、弁論内容は「自分らしくあるために」というテーマで、中国語と出会い、「中国語オタク」になっていった自分の大学生活について発表しました。

語学力向上のため、そして今までの学習の成果を試してみするために参加を決めた弁論大会も、次第に目的が変わっていききました。中国が好きな「中国語バカ」の私を見て欲しい、私の中国への思いを伝えたいと思うようになり、本番までの練習の間、それが自分らしくあるために必要なことなのだと強く感じました。迎えた本番では、聞いている人たちに私の思いが伝わり、大好きな中国語で自分の思いを伝えている瞬間は何とも言えない幸せな気分で、最も私らしい有意義な時間でした。

大会に参加したことで大変多くのことを学び、たくさんの人と出会うことができ、貴重な体験をすることができました。また受賞後もたくさんの人に私の思いを伝える機会を与えていただき、中国語で自分らしさを表現し、その私を見てもらうことで中国に興味を持つ人が増えたらいいなと思いました。

現在は中国語をのびのびと話せるように、そしてもっと多くの人に「中国語オタク」の私を見てもらいたいと、北京第二外国語学院で中国人をはじめ、いろいろな国の人と大好きな中国語を通して交流し、毎日充実した留学生活を送っています。

オープンキャンパスで何気なく参加した模擬授業で、歌のような美しい中国語に魅了され、私も話せるようになりたいと思ったことがきっかけで始めた中国語でしたが、今では自分に欠かすことのできない存在となりました。

これからもこういった機会があれば積極的に参加し、一人でも多くの人が中国に触れる機会に繋がればいいなと思います。



盛田美帆 〈第10期生〉

今回スピーチコンテストに参加して捨てたものと得たものがある。捨てたものは殻に閉じこもった自分、得たものは人前で話せる自分……、と少しの中国語だ。中国語スピーチコンテストの参加の意義は単に中国語を極めるためではない。それどころか作文から添削の過程でいかに正しくて自然な表現にするかを考えだすとキリがないほど、自分の中国語が未熟であることを思い知ることになる。そういう意味で刺激になるが、何より刺激になったのは内向的な自分を人前に放り込んだことだった。今までは人前で話すとき自分の意識が話の内容よりも膝の震えを止めることに集中していた（笑）。スピーチコンテストにできるようになって、意識（気持ち）がちゃんと言いたいことに向いているのがわかり、さらにそれにうなずいてくれる聴衆を確認できたとき、自らかけた金縛り



から解放される感覚をあげることができた。

コンテストの話から脱線するが、私は相変わらず電車での旅が好きだ。つい最近、ゼミ旅行で高知へ向かうことがあって、懐かしい、それこそ中国の電車での出会いを思い起こさせるような出来事があった。それはゴールデンウィーク真っ只中、私は通勤電車さながらの窮屈な特急のデッキで立たされていた。電車が大きく揺れて思わず壁に手を突いたのだが、その時、男性の頭をぶちそうになって思わず「スイマセン」と言った。男性は「いいですよ、しょうがないゴールデンウィークだもん」と軽く笑って許してくれた。そこから会話がはじまり、どこから何をしに来たのか、何を勉強しているのか、さらにはその方も高知に帰省するところのことで、話は車窓から望むことができる吉野川など高知のふる

さと自慢にまで至り、想像以上に話が盛り上がった。そして男性は私たちに名刺をくれて、高知駅で別れた。席に座れなかったことは相変わらず不満だったが、座っていたらあの一期一会はなかっただろう。私の「スイマセン」からはじまる出会いは中国の電車のようなあのカオスから生まれるということか（笑）。私は日本でもこういう体験ができてうれしかった。ただし、また……となると乗車率は少なくとも150%を上回らなければならないだろう。